

月刊

# AMDA

国際協力

# Journal

2

FEBRUARY

2006.2

(VOL.29 No.2)



# インドネシア復興支援活動



救急医療研修



学校訪問救急医療教室

← アチェ州シャークアラ大学医学部での救急医療研修



入浴についての保健教育で、タオルとシャンプーを配布

避難所でのソーシャル・アクティビティー



移動図書館と創作教室

※表紙写真：巡回型教育活動 REACH-Aceh (Reading, Learning and Creativity for Healthy Life in Aceh)

## スマトラ沖地震・津波被災者のための慰霊祭

AMDAが被災者緊急救援活動を実施したインドネシア・インド・スリランカの3カ国で実施



インドネシア スマトラ島・バンドアアチェ  
2005.12.26



インドネ東部・チェンナイ  
2005.12.3



スリランカ東部・カラムナイ  
2005.12.26

AMDA

国際協力  
Journal

2006  
2月号

◇  
CONTENTS



スリランカ・ワウニア県基礎保健  
サービス復興支援プロジェクト

ブーバラサンクラム産科病棟にて。  
左から助産師、乳児、出産後の母親。



◇インドネシア

スマトラ沖地震・津波復興支援プロジェクト ..... 1

◇スリランカ

ワウニア県基礎保健サービスプロジェクト ..... 6

◇スーダン

ダルフル緊急支援プロジェクト ..... 8

◇NGO 相談員からのお知らせ ..... 10

◇寄付者一覧・神奈川支部便り ..... 12

◇JICA 研修員受入報告 ..... 14

## インドネシア・スマトラ沖地震・津波復興支援プロジェクト

AMDA インドネシア 金山 夏子

### 《はじめに》

昨年の12月26日、あの津波から一年を迎えたその日、アチェは深い祈りに包まれていました。被害者であり被支援者であるアチェの人々、そして一年間をかけてアチェを支援し続けてきた国際社会が一体となった一日であったと深く感じています。

紛争地であるという政治的な理由から、インドネシア政府より設置された3ヶ月の緊急フェーズ（12月26日～3月26日）の間に実施した緊急医療支援活動。そしてそれ以降は、長期復興支援フェーズとして、インドネシア政府からの承認を条件とした復興支援活動にもAMDAは従事し、津波から一年目のその日ここアチェで、アチェの人々と共に迎えることができました。

AMDAが長期復興支援事業を2005年5月17日より開始し、9ヶ月が過ぎようとしています。様々な支援機関が技術と経験を生かし、多様な支援活動を繰り返していき、AMDAは、アチェのコミュニティーや人々が津波の

体験を教訓としながら、“Emergency Response” また、緊急災害時に問題となる”Sanitation & Primary Health”に関するキャパシティを高めていくことが重要である、との点に着目し、以下のようなプログラムを立案し、これまで実施してまいりました。

### 《プログラムの概要》

アチェ州立ザイナル・アビディン  
病院支援活動

#### 麻酔科派遣支援プログラム

AMDA、アチェ県保健省及びアチェ

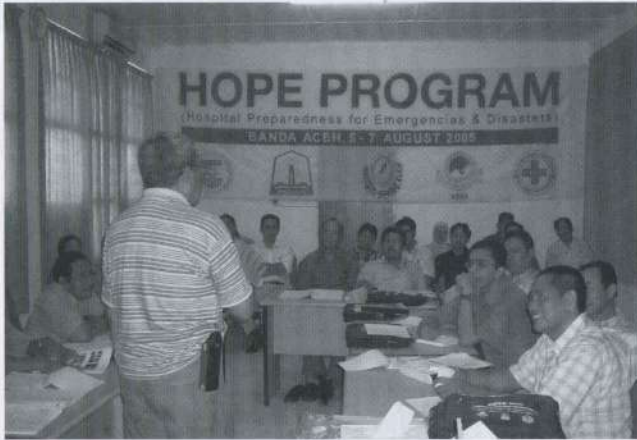


ザイナル・アビディン病院内のICU

州立病院との協議の中で、アチェの医療機関が抱える問題として、麻酔科医師が一名しかおらず手術を行う上での専門医の不足が訴えられました。AMDAはAMDAインドネシア支部と協力し、南スラウェシ州のマカッサルから即戦力となる麻酔科医師を一年間派遣することを決定し、6月から支援を開始。日本人麻酔科医一名を含み、これまでAMDAの麻酔科医5名が州立病院の緊急手術に従事してきました。

#### 看護師派遣研修プログラム

病院院長及び看護師長との協議の中で、看護師の専門トレーニングが十分でないとの報告を受け、特に緊急医療の関連部署（ER、ICU、ICCU、手術室）に所属する看護師をマカッサルの南スラウェシ州立ワヒディン病院へ派遣することに決定。緊急医療に関する講習と、技術トレーニングを提供しワヒディン病院内の医療業務にも従事しています。第一次派遣看護師2名（ICU担当）は既に9月と10月の二ヶ月間でプログラムを終了し、第二次派遣（ER担当）は今年2月～3月に派遣される予定です。



HOPE 講義

### 医療機関緊急対応研修 (HOPE)

アチェ州保健省を含む各医療機関との協議の中で、津波の経験に基づき、自然災害等の緊急時には組織マネジメント能力や関連機関間におけるコーディネーション能力が最も重要であること、そしてその能力向上がアチェでは必要との指摘が多く聞かれました。AMDAは深刻な問題として重視され始めた、緊急時における病院内、また医療機関間におけるコーディネーション・スキルの向上を目的としたトレーニング (HOPE: Hospital Preparedness for Emergency) を2005年8月に実施。緊急時には組織の方針決定者となる、各県保健省長と県立病院院長らを含む35名が参加の対象となりました。

### 救急医療資格取得研修 (ATLS)

アチェの地元の医師らが常にAMDAへ訴えたこと、それは津波が起きた時、自分に何ができたのかが分からなかったという後悔の想いでした。いかなる緊急時にも備え、救急医療の技術を向上させるため、インドネシア外科医協会と協力し、国際緊急医療資格取得トレーニング (ATLS: Advanced Training of Life Support) をアチェ州出身医師35名を対象に2005年9月実施しました。

アチェ州立シャークアラ大学  
医学部支援活動

### 救急医療研修

シャークアラ大学では、救急処置に関する講義が開講され一年未満ということから、より充実した講義内容への発展と、講義で使用する救急処置器具の必要性 (現在はザイナル・アビディン病院が貸し出し) がニーズとして挙げられました。学生自身も津波を経験したあと、救急処置の習得の重要性を実感し、自然災害等による緊急時に役



ATLS 実技

立つ、よりプラクティカルな知識と技術を身につけたいとの要望に応えるため、AMDAインドネシア支部から各災害地に派遣されてきた実地経験豊かな指導陣を揃え、医学部生60名を対象にした救急処置のトレーニングを2005年7月に実施しました。

### 保健医療研修

シャークアラ大学では、保健衛生を専門にした教授陣が不足しており、学生を教育する上で、講義の内容や陣容が十分ではないという点が問題視されていました。津波から半年が経過し、避難所での長期滞在生活が定着すると同時に生じてきた保健衛生問題に対処するため、また、保健衛生問題は緊急時における二次災害として位置付け、AMSAのメンバー60名を対象にした講習会を2005年8月に実施しました。

### 小・中・高等学校訪問教室

#### ・救急医療教室

7月にシャークアラ大学で実施された救急医療研修の受講生であるAMSAメンバー60名がトレーナーとなり、地元の中・高等学校を訪問し、自然災害に関する学習とそれに対応するための避難訓練、及び人工呼吸蘇生法等の応急処置のトレーニングを2005年8月から毎週実施しています。

#### ・保健衛生教室

8月にシャークアラ大学で実施された保健医療研修の受講生であるAMSAメンバー60名がトレーナーとなり、地元の小学校を訪問し、「栄養・保健衛生・応急処置」に関する訪問教室を、関連キットの配布と併せ2005年10月から毎週行っています。

### 避難所でのソーシャル・アクティビティー

#### ・REACH-Aceh : Reading, Learning

### and Creativity for Healthy Life in Aceh

津波から一年が経過してもまだ続く避難所での生活。そこで暮らす子供達のため、2005年6月から開始した巡回型教育活動がREACH-Acehです。プログラムは大きく三つ。移動図書館として避難所を訪問し、そこに集う子供達に栄養・保健衛生教育を実施。また、津波を経験した子供達の心をケアするための創作活動 (絵画、作文、詩やドラマの創作、ゲーム) も行い、プログラム終了時にはそれらの作品を広く紹介するための展示会やフェスティバルも行っています。

### 《プログラムがもたらしてきたベネフィット》

これらのプログラムを実施し、AMDAがもらすことができた最大のベネフィット、それは何よりもAMDAとアチェの人々の間に築くことのできた強い絆ではないでしょうか。現在、バンド・アチェで活動する日本のNGOとしてはAMDAが唯一であり、且つ、約90名にのぼるスタッフは全員がインドネシア人、なかんずくその内の2名を除いて全員がアチェの地元の人々。そのアチェの人々からなるAMDAのチームが何よりも、ローカル・パートナーシップを尊重し、AMDAが地域に根付き、活動を続け得ることのできた結果の一つであると信じます。

AMDAの研修を受けた看護師らが、アチェの病院内における今後の課題を指摘し、自ら積極的に改善に取り組もうとするイニシアティブをとっている姿。「大学での勉強だけではなく、将来コミュニティに貢献できる医師となるため、地域の人々とプログラムを通じてこのように接することは貴重な体験だと思う」と積極的にAMDAの活動に参加される医学部の学生達。その医



REACH-Exhibition

学部生らによる講義を熱心に聞き入り、興味深く応急処置の練習を繰り返す児童達。また、自ら被災者でありながら、子供達への社会教育活動のため様々なアイデアを振り絞りながら避難所を巡回するスタッフ。「僕達に新しい知識を与えてくれた AMDA が大好きです。」と手紙を読んでもくれる避難所の子供達。「プログラムを終了せずに AMDA の活動を続けて欲しい」との言葉がかけられる時、地道でありながらも裨益者一人一人のために、日々支援活動が続けることが何よりも大切であるということを強く実感します。

#### 《直接裨益者数データ》

長期復興フェーズ (2005年4月6日～12月末)

医療機関緊急時対応研修への参加県:	10 県
救急医療資格取得研修への参加県:	15 県
派遣麻酔科医師による直接手術患者数:	632 名
派遣看護師による外来・入院患者対応数:	3,326 名
救急医療に関する学校訪問教室:	1,438 名
保健衛生に関する学校訪問教室:	1,279 名
避難所で生活する子供のための巡回医療教育教室:	9,634 名
直接裨益者数 合計:	16,309 名

#### 《これからの展開》

2005年5月から開始された長期復興支援活動の第1フェーズは、医療機関を対象に“Emergency Response & Primary Health”に関するプログラムを実施してきました。今後は第2フェーズとして、“Hospital Support, Community Support & Peace Building”を軸に展開していきます。

#### Hospital Support (アチェ州立ザイナル・アビディン病院支援活動)

・麻酔科派遣支援プログラム

・看護師派遣研修プログラム  
既にこれまで実施してきた両プログラムを、AMDA インドネシア支部と協力し今後も継続させていただきます。

#### Community Support (巡回型教育活動)

- ・救急医療教室
- ・保健衛生教室
- ・REACH-Aceh

地元の医学生と今後も協力を続け、地域の学校と避難所を対象とした巡回型の教育活動を継続していきます。

#### Peace Building (医療和平)

- ・REACH Aceh for PEACE

(健康・平和教育)

- ・巡回診療

第2フェーズの新たなプログラムとして、ここアチェにおいても AMDA がこれまで紛争被害地で展開してきた医療和平をいよいよ開始します (2005年8月15日、インドネシア政府と独立派 GAM との間で和平合意が締結)。実施地は30年間にも及ぶアチェの紛争により、大きな被害を受け続けてきた南アチェ県と東アチェ県 (州都のバンダ・アチェからそれぞれ330km)。バンダ・アチェで津波被災者を対象に行ってきた REACH (移動図書館、保健・衛生教育) に平和教育活動を加え、紛争下で心にトラウマの傷を負った子供のための、健康と平和のための教育プログラムです。

AMDA のスタッフは既に2005年12月から2006年1月にかけての2週間、専門家による心のケアと平和教育活動に取り組むためのトレーニングを受講しました。



REACH-Festival

また、紛争により避難生活を強いられ、元のコミュニティが崩壊してしまった地域に、社会活動としての REACH を実施、そして巡回診療を実施するための“AMDA Peace Community Center”を設置します。AMDA による活動の他にも、住民の人々がお祈りや地域活動のために利用し、コミュニティの再構築に貢献することを目的としたものです。現在、南アチェ県では1月から、東アチェ県では2月から活動を開始するため準備を進めています。

#### 《結びに》

人類史上、最も悲劇的な自然災害となったアチェの津波。一年が目まぐるしく過ぎ、復興の状況については、「あれだけの規模からよくここまで再建が進んだ。」「あれだけの支援金を受け、いまだにテント生活をしている被災者がいるなんて、復興は全く進んでいないではないか。」という様々な見方があります。しかし、現場では『目に見える支援や再建』と『目に見えない結果や復興』が交錯し、人々のニーズも日に日に変わります。その様な環境の中で、『AMDA に望まれていること、AMDA にしかできないこと、そして AMDA であるからこそすべきこと』を常に心に置かなければ、今自分達が取り組まねばならないものを見失ってしまいます。アチェの人々の側に立つ AMDA であり続けることができるよう、これから始まる長期復興第2フェーズにも「困ったときはお互い様」の心で、アチェのスタッフと共に取り組んでまいります。変わらぬ皆様からの温かいご支援を、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## インドネシア・アチェ医療和平事業

約30年に及ぶ内戦被災地であり且つ一昨年12月26日の地震・津波の最大の被災地の一つとなった、南アチェ県では、その地理的条件また治安上の不安定さから、これまで全くと言ってよい程に、国際機関及びNGOの支援が入っていなかった。2005年8月15日、反政府組織・独立アチェ運動（GAM）と政府との間で再度和平協定が結ばれて以降、その合意の実施（GAMの武装解除と国軍の順次撤退）は進んでおり、アチェ州全体のセキュリティー・レベルが下げられたことで、これまで国際社会が支援に入りにくかった地域へのアクセスが可能となり始めた。この状況をいち早く受け、AMDAはこの一年間のバンダアチェでの活動経験に基づき、本年1月より南アチェ県（Aceh Selatan District）内の6つの村で、活動を開始することを決定した。

### 【南アチェ州活動予定地】

#### 距離

バンダ・アチェ市から約330Km

#### 移動手段

長距離ミニバスで15～16時間  
セスナ機で1時間

#### 津波被害

行方不明者1086名、死者1566名、  
埋葬者1566名

#### 紛争被害

国内避難民5933名、キャンプ7ヶ所  
2003年時点/南アチェ県の特徴としては、元反政府ゲリラの数や軍との衝突の数よりも、紛争の影響により国内避難民となった数が多い地域。

### 【調査】

候補地の選択については

- ・これまでの紛争の影響を受けた子ども達が多い地域
- ・これまでNGOが入りにくかった地域
- ・AMDAスタッフの出身地、もしくはそれに近い地域

を条件に絞り、南アチェ県と東アチェ県が候補地として挙がる。

地元のコンタクト・パーソンとして、アチェで活動するインドネシアの環境ローカルNGOのサルブニス氏より、AMDAのアチェでのプログラムを知ったことから、「(自身の出身地であ

り支援の届いていない)南アチェ県でも是非とも実施してもらいたい」との要請を受け、ネットワークの面で全面的サポートを受けることが可能となった。

実施フィールドとして、南アチェ県内の6箇所の候補地の推薦を受け、各村の村長とコーディネーターを訪問し、AMDAのプログラムを紹介した。

AMDAは非イスラム圏に本部のあるNGOであるため、非イスラムの文化を入れるのではないかと、当初は懸念されたが、膝詰めの対話をする中で、プログラムの趣旨を理解してもらい、各村長から「是非実施してもらいたい」と要請を得るに至った。

### 【巡回候補地】

予定地6カ所の特徴としては、3ヶ所が2000年から2003年にかけて住民が紛争のために移動を繰り返し、最終的には元の村に帰還している集落。もう3カ所は紛争が激しかった2000年から2003年の間に、GAMと政府側との武力衝突が多くあった地域であるが、現在は安定している。住民の多数がGAMメンバーであったため、昨年8月に締結された和平後に元GAM兵士が帰還している集落。



### 【活動内容】

現在バンダ・アチェ被災地で実施しているプログラムをベースに、紛争地域で育ってきた子ども達のための心のケアに取り込む。『移動図書館・保健衛



南アチェ県と東アチェ県で昨年12月中旬に現地調査実施

生教育・栄養教育』を軸とするが、バンダ・アチェで実施している津波に関する作文や絵画の創作活動の代わりに、『平和な心を学ぶための活動』として、イスラム教の歌やアチェの伝統民謡を使つてのダンス・セラピーや、詩などの創作活動をプログラムの具体案として計画している。

1月16日に資材を南アチェに持ち込み、上記活動を開始する。加えて近い将来には、6つの村を巡回する巡回診療活動も計画に加え、第4のAMDA医療和平事業となる。

### 【実施する現場でのチーム体制】

南アチェ県出身のスタッフ（フィールド・コーディネーター）と、バンダ・アチェ出身のスタッフ2名が、南アチェ県に常駐する。事務所としては、サルブニス氏の事務所の一部屋を借りる。プログラム実施スタッフとして、南アチェ県の地元出身者を2名、そして巡回するキャンプや村の地元の人を各実施場所で2名ずつ6カ所で計12名を雇用する。

津波後の復興支援事業の継続に皆様からのご支援をお願いいたします。

郵便振替

口座番号 01250-2-40709

口座名 AMDA

※通信欄に「津波復興支援」とご記入ください。

お問い合わせ

086-284-7730 AMDA 広報室

「医療和平」とは

AMDAが提唱。紛争当事者の双方に中立人道の立場から、国際医療協力をもって紛争の緩衝を図り、和平プロセスに寄与する試み。過去例として、対立するアルバニア系・セルビア系住民双方への医療支援の実施(コソボ紛争)、タリバンと北部同盟の間でのワクチン停戦(アフガニスタン)、スリランカ北部反政府組織タミル・イーラム解放の虎：LTTE支配地域と南部シンハラ政府地域、東部イスラム地域の3地域での巡回診療と健康教育の実施(スリランカ：現行)。これまでの3つの医療和平事業に続き、アチェは4つ目の事業となる。

「AMDA Reach-Aceh」とは

Reading, Learning, Creativity for Health Life in Aceh

「読んで、学んで、創造性を発揮して、アチェの健康生活を取り戻そう！」緊急救援時期からアチェで医療支援を行ってきたAMDAが、復興支援として被災地の人々が持つ「一日も早く元の生活をとり戻そう」とする強い意志を応援する活動として、Reading (移動図書館)・Learning (保健衛生教育・栄養教育)・Creativity (絵画・作文・造形活動)を軸として、子どもや青少年、その親達を対象に実施してきた活動。

GAM：独立アチェ運動

アチェは周辺地域がオランダ領となった19世紀から独立を保ち、1949年インドネシアが共和国としてオランダから独立した翌年、北スマトラ州に編入されることとなり武装闘争が激化。1959年スカルノ政権により特別州とされる。1976年12月4日ピディ県にて、実業家ハッサン・ディ・ティロが独立アチェ運動：GAMを結成、1979年にスウェーデンに亡命政府樹立。1999年GAMがアチェ独立を宣言。治安は極度に悪化。2001年石油会社エクソンモービルが治安悪化のためアルンガス田の生産を4ヶ月中止。同年スハルト政権崩壊に伴い、アチェ特別自治法が制定され、イスラム法の適用とアチェへの石油収入の確保が約束される。2005年8月15日ヘルシンキにて、GAMと政府側との間で和平協定が結ばれた。

中立人道支援を実施

AMDA活動報告  
救える命があれば  
まいぐども

菅波 茂



魂と医療のプログラム

沖繩平和賞受賞を契機に、連載の機会をいただき、一年になる。今回は、AMDAの戦争に関連したプログラムを紹介させていただきます。  
AMDAの平和の定義は「今日の家族の生活と明日の家族の希望が実現できる状況」である。今日の生活とは食べられて健康であること。明日の希望とは子どもに教育を受けさせられること。その阻

ニスタンそしてスリランカで実施してきた。「医療和平」とは、紛争の当事者の双方に中立人道支援の立場で国際医療協力を行い、紛争の緩和を図り和平プロセスに寄与する試みである。子どもの命は普通であることへの共鳴が大前提となっている。  
AMDA「魂と医療のプログラム」は、戦争と解プログラムである。第二次世界大戦で亡くなったすべての方々に対して、現地で日本と地元の聖職者による合同慰霊祭を開き、関係者に医療を提供する。慰霊祭は、二〇〇〇年から延べ二十二

診療所に「沖繩平和賞」名



人権を表現している。AMDAの人権の定義は「存在を認めること」である。具体的には、「あなたのことを忘れていません。あなたに関心を持っています。あなたを必要としています」ということである。氏名を記録

するとは「あなたのこととを忘れていません」と語りかけることを意味する。平和の礎には沖繩の心根の優しさが宿っている。  
AMDAは〇四年十二月二十六日に発生したスマトラ島沖地震・津波  
この連載は毎月第四日曜日掲載します。

## ワウニア県基礎保健サービス復興支援プロジェクト

### インターン活動報告

川端 雄一

2005年の9月中旬から12月中旬にかけての約3ヶ月間、AMDAがスリランカ・ワウニア県で行っている基礎保健サービス復興支援事業にインターンとして参加させていただいた。ここではその活動報告とインターン期間中に感じたことを書こうと思う。

#### 1. インターン参加への経緯

私は現在山口大学医学部の3年生である。昔から国際医療に興味を持っていた。テレビで貧しい国の子供達を見て、そういう人達を助けるのは単純に正しくて必要なことだと思ったり、国際医療の現場で働く人の講演を聞いて格好がいいなど感じたり、父親の影響により、漠然と興味を持つようになったのだと思う。その後興味は持ち続けていたのだが国際医療について特に集中的に勉強することはなかった。そんな中、大学のカリキュラムの関係で約3ヶ月間自由に活動できることになったので、以前AMDAの活動にインターンとして参加したことのある先輩の勧めもあり私も同様に参加させていただいた。参加前は次のようなことを考えていた。海外で行われているプロジェクトの1つの具体例をとにかく自分の肌で感じて体験したい、体験することを受け止めそこから何か見えてくるものがあっていい、何か出来るものがあつたら前向きに物事に取り組もう、といった漠然としたことだ。また、“現地の人達のための活動”とはどのようなものなのか？そして、そのような活動を行うことは可能なのか？といったことを活動見学を通じて見ていこうと思っていた。

#### 2. 活動見学

AMDAはスリランカ・ワウニア県において内戦後の復興支援の一環として母子保健サービスの向上を目標

として事業を行っている。妊産婦が適切な保健サービスを受けられるように場所、知識を提供していこうというものだ。場所の提供という意味では分娩の総合病院への一極集中を避けるために地域産科病棟の能力の充実とその宣伝活動、総合病院から地域産科病棟へ適切なリファールを行うための地域助産師・保健ボランティアの能力向上と連携強化を目指して活動を行っていた。また、地域助産師や保健ボランティアは検診や家庭訪問を通して直接妊産婦と接する機会が多いので、地域助産師や保健ボランティアの能力向上は妊産婦への知識提供にも結びつく。私がワ



地域保健プロモーターと助産師による健康教室  
地域の母親を対象に家族計画や妊娠時の栄養について教育を実施

ウニアに到着した次の日からさっそく活動見学が始まった。その内容は地域産科病棟への医療器具の提供、地域産科病棟の説明が書かれたパンフレットの説明と配布、地域産科病棟で出産を行った母親への記念写真と記念品の贈呈、保健ボランティアが家庭訪問で得た情報や問題を共有して共に解決を探る場であるミーティング、地域助産師による保健ボランティアに対する料理教室、地域助産師と保健ボランティアによる母親たちに対する料理教室、家族計画などの個別テーマごとの母子保健教育などであった。このように活動は多岐に渡っていたが全ての活動において上に述べた目的のために行っているという意志がみられた。また、ミー

ティングや料理教室、母子保健教育では日本人はなるべく口出しをせずに現地の人たちで進行してもらおうとしているのが印象的であった。

#### 3. 活動参加

活動見学を始めて1ヶ月位経ち、事業の概要が把握できた頃に一つの仕事を任せてもらえた。事業の中間評価のための調査である。母親の知識の向上や彼女たちが保健サービスをどのようにとらえているか、ということは事業評価のための1つの指標となる。これらのことを調べるためにアンケート調査を行った。具体的にはアンケート表を作成するところから始まり、実際にアンケート調査を行う臨時スタッフへの説明、アンケート調査への同行、データの集計と分析、レポートの作成までを事業統括である添川氏の監督の下で行った。これは自分にとって本当に大きな経験だった。まず、インターンという身分とはいえ責任がある仕事を任せてもらえることで緊張感と充実感を持って毎日を過ごすことができた。アンケート表を作る段階では何を問うべきか考えることによって事業の目的を再確認し改めて個々の活動の意義を納得することができた。臨時スタッフに対してアンケート表の説明を行った際に自分では十分説明したと思っても、実際に調査を始めるとこちらの意図通りに調査を行ってもらっていないことも何回もあり、現地の人達と意思疎通をすることの難しさを実感した。アンケートで得られたデータの解析をすると分野ごとに色々な結果が出てきたが、その中で母親の保健サービスに対する認知度などでAMDAの活動の効果が顕著にみられる点があった。そんな時はAMDAの活動によって行政を巻き込んで地域社会が変わっていく様子が実感できて感動を覚えた。レポート作



成は自分にとって英語力、論理的な文章を書くということ、そしてデータを基に考えるということを経験から訓練し直す良い機会であった。

#### 4. 感じたこと

AMDAの活動に参加する前は、NGOといったら現地住民の中に溶け込んで一体となり、現場から変化を起こしていくような活動を行うといった印象を持っていた。また、その活動内容は文書で読んで知ってはいたがボランティア的に困っている現地の人々を手助けし、時には物資を援助するといった漠然とした印象が自分の中に残っていた。この印象は私が国際協力やNGOに魅力を感じる主たる要因の中の一つとなっていたわけだが、今回のインターン活動を経て完全に覆された。私がこの3ヶ月間の経験で得たNGO活動に対する印象は、明確な目標を持ち、それを達成するためのプロ集団による活動といったものだ。先に述べたように一つ一つの活動を目的意識を持って行い、日本人スタッフと現地スタッフの関係は上司と部下の関係のようなもので、お金の管理も日本の感覚では微々たるものでもキッチリとしていた。活動の手法は“現地住民の中に溶け込んで一体となる”といった印象ではなく、AMDA自体は一步引いて現地の人達主導で物事が動けるように進めていく、ワウニアの政府機関と常に連携してシステム自体から変えていこうとしているという印象を持った。AMDAがワウニアでの事業を終了した後も活動が現地の人たちによって自主的に継続されるように、という意図で行っているということだ。

このように現地の人たちによる自主的な行動を促すことは“現地の人達のための活動”の一つの形だと思った。そのために政府機関と常に連携をとりシステムを変えていくという手法は私にとって新鮮であり納得のできることであった。今まで私は国際協力=困っている人達を助け、物資を援助するものと単純に考えていて、それだと援助を受ける側のためになるというより援助する側の自己満足に終わる可能性があると思っ

ていた。そして、そこを見極めるのが今回のインターン活動を行うにあたっての自分のテーマであったわけだが、単に援助を行う側の自己満足では終わらないような納得できる具体例を体験できたことは貴重な経験であった。

AMDAのワウニア県における現在の事業は2004年5月から始まったものだ。従って私が活動に参加した頃はすでに1年以上経過していた。何度も述べたように活動は明確な達成目標に向かって行われていた。そして全ての活動には自主的な行動を促すという意図が一貫してみられた。ここまでの3ヶ月の体験で感じたことであり、“現地の人達のための活動”という自分の中のテーマに照らし合わせてみると矛盾のない納得できる事業を体験できたと思っている。また、事業の達成目標が妥当なものであるかどうかを考えることも重要であると感じた。つまり地域の需要に基づいた目標が設定されているのかということである。需要を探るにはまず、地域住民への聞き取り調査という方法が考えられる。これは事業を始めるにあたって最初に行われることであり実際にどのように行われたか体験することはできなかったが、今考えると私のインターン期間中でも何回も地域住民と接する機会があり需要を探るチャンスはあった。しかしこれが満足に出来なかったのは自分の積極性の無さによるものであり反省点である。今後は国際協力を考える際、地域の需要とは何か？またそれをどのように探っていくのか？といった視点でも見ていこうと思う。

#### 5. 将来に向けて

今回の体験によりNGO活動に対する印象はがらっと変わったわけだが、依然として国際協力に対する興味は消えておらず、将来は国際協力の現場で仕事をしたいという気持ちも持っている。しかし自分の力の無さを実感した。自分の語学力の無さや、ぐ



アンケート調査の様子(中央:筆者)

いぐい物事を推し進めていく力強さの不足を添川氏や中嶋氏(業務調整員)を見て度々痛感したし、今回見学させていただいたようなしっかりとした事業を立ち上げて進めていける自信は今のところ全くない。心意気だけでは意義のある仕事はできないのだなと感じた。将来に向けて、自分は医師として国際協力の現場で何が出来るのかをしっかりと見極めていく必要があると思った。そのために学生の今、具体的に何をすべきなのか正直よくわからないのだが語学力を磨くことと、国際協力について自ら勉強していくことは少なくとも必要だと思っている。

#### 6. 最後に

最後になりましたが、私をインターンとして受け入れ貴重な経験をさせていただいたAMDAの皆様には感謝しています。添川氏からは厳しいけどしっかりとした指導を受けました。たくさん聞かせてもらった話は自分の財産となっています。これからもよろしくお願いします。中嶋氏とは寝食をともにし、毎日浴びせかけた生意気な意見や質問にも真摯に答えていただきました。失礼な言い方ですが良い先輩かつ友人ができたと思っています。そしてスタッフの皆様—Thayaparan氏、Nirranchan氏、Yogarajah氏、Shirly氏、Mylvaganam氏、Suhuri氏、Suthakaran氏、Shelton氏、Raniammah(アンマ)氏—。親切で気の良い皆と過ごした日々と一緒に旅行に行ったこと、家に招待されたことは絶対に忘れません。本当にありがとうございました。

## ダルフルール緊急支援プロジェクト

## ダルフルール雑感

AMDA スーダン 館野 和之

スーダン、南ダルフルール州の州都、ニャラ市に赴任して1ヶ月以上が過ぎ、アラビア語訛りの英語にもかなり慣れた。毎日のハプニングをくぐり抜けるようにして生活をしている。

道路ではロバが荷車を引き、その後ろで国連マークの白い車両がうろうろしている。街角には避難民、難民とおぼしき人たちが枯れ枝で小屋を建て、子どもの物乞いも多い。自分の腕を掴んで金をせびるくらいの凶々しさがいっそう爽快だ。

紛争地だから、国際NGOのオフィスが軒を連ねている。その一方、広場では太鼓を叩いて合唱し、夜中まで踊っている一団がいる。暗さは微塵もない。自分の見たニャラはそんな町である。

AMDAの一員として海外援助の世界に身を投じて早2ヶ月。この地では主に市民病院への支援を行っている。そもそも病院は生と死の混じり合う場所だ。ここでゴロンと地べたに病人が転がり、亡くなった人をタンカに乗せて何処かに運ぶ光景は何度か目にした。これはどの病院でもあり得る光景だが、緊急に搬送された人の付き添いが銃を担いでいる光景を見ると、ここが紛争地であることにはと気づかされる。

国連のセキュリティー・ミーティング、WHO（世界保健機関）やOCHA（国連人道問題調整事務所）のコーディネーション・ミーティングに参加すると、ニャラ市が混乱することはまずないと思われる。しかし、ニャラ郊外の治安の悪化は疑う余地がない。3、40キロ先は軍事衝突が頻発し、強盗が跋扈している。村が焼かれ、銃を使った事件と報復が繰り返されているようだ。

治安が回復しないところでどんなに援助を行っても所詮は行き詰まってしまふ。治安が不安定のままだと、ダルフルールでNGOが行えることは限定されていくだろう。国連とAU（アフリカ連合）軍は治安を回復するのに躍起である。それと並行して、NGOなど人道支援団体は難民や貧困層の生活がこれ以上悪化するのを何とか食い止めている。

AMDAがスーダンで支援するニャラ



外来病棟に隣接して増設した処置室



臨床検査室の前に日除けを設けた。検査票を持って待つ患者と検査結果を待つ患者でこたがえした混雑はずいぶん解消された。



AMDAの指導員による、超音波診断装置の指導

市民病院は南ダルフルール州の中核病院である。輸血供給体制を整備し、外来診療の機材をサポートして、病院スタッフのトレーニングを実施する。ニャラ市では医療機材を入手することが困難なので首都のハルツームで調達する。襲われて強奪されるから陸上輸送は不可能とのこと。コンボイを組んでもダメらしい。すべて空輸で飛ばす。

ものを送り、受け取り、病院に設置して実際に使えるよう、病院スタッフをトレーニングする。ここではそんな仕事をしている。そしてこの事業もほぼ終結に近づいた。病院は急増する患者への対応に追われた緊急救援のステージから、中・長期的な計画を推進す

る段階を迎えている。あくまで緊急救援として入ったAMDAは、今が退き時と考えている。

この中核病院で、11月、12月と、ECG（心電図）とウルトラサウンド（超音波診断装置）を新たに導入し、使用方法やメンテナンスのトレーニングを実施した。人と物の両面から病院のキャパシティを底上げする。トレーニングは人的資本拡充の柱である。講師がしっかりした人なら、訓練内容に問題はない。トレーニングはアラビア語と英語でなされる。当初は日本人が直接指導したが（現在は地元の指導者）、今ではAMDAの役割はトレーニングの企画・管理・運営となっている。

実際トレーニングの運営というのが日常どんなことかといえば、やっていることはたとえば、講座の事前準備から、講師や参加者への食事、消耗品の手配などである。講師は病院のドクターだから職場での食事は毎日しているはずである。わざわざトレーニングで食事をふるまう理由は何もない。しかし、こちらの常識ではトレーニングは食事付きとのこと。首をかしげざるを得ないが、スタッフによると、「各自に食事をさせると、ばらばらになってしまい、予定通りに集まらない」とのこと。そこは郷にいれば郷に従えで、とりあえずスーダン流にお付き合いすることにしている。

とすると、スーダン人は尊大かというところではない。彼らは礼儀正しく、人なつこい。接待や儀礼の感覚が日本人と多少異なるだけだ。

たとえば、スーダン人にとって自分の名字「タテノ」はいかにも発音しにくい。そこでニックネームの「カズ」の方が言いやすいよ、と話す（自分の名前はカズユキである）。すると、現地スタッフは自分を「ミスター・カズ」って呼び出すといった具合である。へんてこだが、これはこれでよしとしている。大きなまちがいじゃない。こんな風だから、部下に物品を購入に行かせて領収書を取ってこさせると、宛名は「ミスター・アムダ」。何となく納得する。

ただ、困った輩もいる。軍事政権に限らず途上国は役人天国だ。AMDAが

拠点を移すと聞いた地元のある役人が、事務所内の機材を自分の役所に寄贈するようにと言ってきたりする。こんな人たちとも渡り合わねばならない。話し合いは英語。通じなければ、身振り手振りでとにかく伝える。なだめすかしたり、怒ったふりをしたり。煮詰まったところでイスラムの巡礼「ハッジ」の話に話題を振ると、「お前はイスラムか」と聞かれる。「もちろん違う」と応え、笑いながら「ハッジ」はグッドだなどと言って煙に巻くと、得心したように帰っていく。しょうがないと思いつつ何か憎めない。



ラマザン（斎戒月）の楽しみ、イフタル。隣近所、親戚などが集まって、賑やかにいただく。ニャラの郷土料理も並ぶ。

しかし、偉そうな役人ばかりではない。たとえば、現地職員の税金を払いに税務署を訪れた。当の役人から「税率がよく分からない」と言われて面食らってしまう。今までどうやって徴税していたのだろうか。ひょっとしたら本当は徴税する気がないのかもしれない。

税務署ではお茶をふるまわれたり、日本のことを尋ねられたり歓待してくれた。訪れる人がいないのか、あるいはよほど東洋人が珍しいのだろう。

税金を納めたら、今度は「おつりが無い」。細かいお金がないのだという。実際小さな額の硬貨は存在しないからだ。こんなことはもう慣れっこで、40ディナール（約20円相当）ぐらい多く払い、大笑いして終わりである。

自分の肩書はAMDAニャラ事務所代表/システム管理専門家。しかも名刺には、AMDAスーダン事業代表代行という文言も加わっている。いかめしいことだ。しかし、要は紛争地の田舎の事務所長ということ。スーダン内には今はAMDAの日本人が2人しかいないから自分が代行ということに過ぎない。

気がつけば、数ヶ月前は給料をもらう立場だったのが、今や現地スタッフ8人を抱え、彼らに給料を払う立場だ。境涯の変化に驚くばかり。事務所の車に運転手、24時間態勢の護衛付き。物々しいことだ。この地では車がないと活動は不可能だし、事務所の警備員を雇うことは常識である。

24時間のガードと言っても要は門番で、夜は小屋で寝ている（これは護衛か？）。3交代で警護してくれるが、勤務中に目薬を買いに走るし（仕方がない）、たまに映画を見て遅刻したり、暑い夜は氷水を飲んでくつろいでいるよ

うだ。まあ、のどかなものである。

停電は日常茶飯事。長いと朝から夕方7時まで。こうなるとオフィス・ワークは難しい。外回りは出来るが、停電に断水が加わると仕事どころではない。仕事を一時中断し、水の確保に努めねばならない。オフィスに発電機がないので電気は自分で作れないが、水は買うことが出来る。

水槽をロバで運ぶ人たちがいて、彼らから水を買う。一度夕方に断水し、ロバの水売りを見つけては「水をくれ」と聞くが、みな空っぽ。さすがに途方に暮れてしまう。ガードはこんな時に頼りになり、どこからか見つけて連れてきてくれる。

もちろん電気が止まったまま夜になることもしばしばである。そんなとき、暗闇の中でガードと一緒に門の前に座り、雲一つない空を見上げると豪勢な星空が広がっている。このまま電気が回復しないなら、このままここで寝てもいいかと思ったりする。

夜といえば、オフィスの裏に住む一家の娘はとんでもなくやかましく、毎晩深夜2時から1時間以上も叫ぶ。叫ぶ内容はもちろん分からない。ある日、さすがに頭にきて、「静かにしろ、深夜だぞ！」って怒鳴り返してみた。もしかしたら理解するかと思って英語で怒鳴ったのだが、やっぱり分からなかったらしく、相も変わらずわめき続ける始末。ため息ものである。ニャラ市の治安は問題ないが、こんなところで健康への危機を感じる。

イスラムでは日に5回お祈りの時間がある。そのたびに礼拝所（マスジッド）の尖塔（ミナレット）から拡声器でアザーン（礼拝の呼びかけ）が流れる。サウジアラビアのアザーンは聞き惚れるくらいだが、ニャラのアザーンは日本のチャルメラに似ている。

このチャルメラ・アザーンが夜な夜

な流れ、その下では野犬が騒ぐ。ひどいときは、夜中の1時頃からずっと吠えっ放しである。こいつを路傍で見つけたら（夜歩きできないので見つけられないが）石を投げるか、棒で叩いてやっつける決意をしている。

ただ不思議なことに、こいつらは家畜を襲わないようだ。そのせいとは思わないが、昼間、オフィスの回りは牛とヤギだらけである。ヤギは可愛くない。うるさいだけである。人を恐れないので道端では車両通行の邪魔以外何物でもない。朝、車を出そうとすると、車の下の影で涼んでいることもある。舌打ちものである。

休みの日など、朝から子ヤギがメエメエ鳴いていると、なぜか無性にムカついてくる。取っ捕まえてじたばたするのを押さえつけ、首をかじりたくなる衝動に駆られる。いまだにそうしないのは、衛生上問題があるからに過ぎない。

人や犬やヤギがうるさい中で、牛やロバのおとなしきは驚嘆に値する。もっともロバは人にこき使われても反抗しない家畜といったところだが、牛が悠然とゴミを漁る風体は印象深い。しかも彼らは牛乳を提供し最後には人間に食われるわけで、思えば偉いものだと感心する。ちなみにこの牛肉は安い上に大変美味しい。何を食べて育ったかは考えないことにしている。

一方、野菜もお茶も味わい深い。特にお茶については、スーダンがどうして輸出しないのか首をひねりたくなるくらいだ。昼食はほぼスタッフが作ってくれる地元料理をいただくが、料理を口に運ぶのは右手、もちろん手づかみである。慣れるとこの方が美味しく感じるから不思議だ。あまり慣れすぎると、日本に帰国したときに社会復帰が危ぶまれる。

スーダンはいざ来てみるとごく普通の国である。普通といえば語弊があるかも知れない。紛争地で、もちろん悲惨な面も多い。国際政治の矛盾も見え隠れする。何一つ物事が思い通りに進まない。しかし、ニャラ市は喧噪に満ちていて、妙に人間くさい。

あと1週間で、この地を離任することになるだろうが、ともかく冷静に観察することを心がけている。諸氏のご叱正を仰ぎながら任務を全うしたいと願っている。

（2006年元旦、ダルフルにて）

## NGO や国際協力に関するさまざまな質問にお答えします お気軽にお問い合わせください！

NGO 相談員に何を相談したら良いのかと思われる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今年度の相談案件を見てみると、将来国際協力の分野での就職やボランティア活動への参加に関するものが最も多く、また、既に国際協力 NGO に所属されている方から、特定の国の情報、NGO の活動環境、運営上のノウハウなどについて相談を受けることもあります。

NGO 相談員の強みは、こうした質問に対して、相談員自身あるいは所属する団体の経験に基づいた回答ができる点にあると考えます。国際協力への第一歩を踏み出す、あるいは、現在行われている活動を発展・改善する際のお役に立てればと思います。



鳥取「タイムフェスティバル」相談コーナー



「地球市民フェスタ in おかやま 2005」相談コーナー



広島「国際交流・協力の日」相談コーナー

AMDA は、引き続き、平成 17 年度も NGO 相談員業務を外務省から委嘱され、田中一弘と奥谷充代が、みなさまのご相談に応じています。

### 「NGO 相談員制度」とは

国際協力 NGO の設立、NGO 活動への参加、組織の運営・管理、開発途上国に関する情報、NGO 相互の情報ニーズに対し、経験豊かな日本の NGO 団体が相談員となり、適切なアドバイスを行います。また、国際協力に対する理解促進のため、NGO 相談員が地方自治体や教育機関などと連携して行う出張相談サービスも実施しています。

外務省 [http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/oda\\_ngo/shien/kankyo.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/oda_ngo/shien/kankyo.html)

### AMDA では

- (1) 組織の運営管理一般に関する相談  
(団体設立手続き、NPO 法人化手続き等)
- (2) NGO 活動の内容全般に関する相談  
(事業マネジメント等)
- (3) 国際協力に関する相談  
(医療・保健衛生、農村開発、住民参加型援助、緊急災害援助等)

の分野でご相談に応じています。

### お問い合わせ

member@amda.or.jp TEL 086-284-7730

田中一弘 (たなか かずひろ)

奥谷充代 (おくたにあつよ)

たとえば、次のような質問が寄せられています

\* 詳しくは、

AMDA ホームページ

[http://www.amda.or.jp/about/counselor\\_on\\_ngo\\_affairs.htm](http://www.amda.or.jp/about/counselor_on_ngo_affairs.htm)

をご覧ください。

## 外国事情

**質問:**世界のストリートチルドレンや障害者への支援について調べており、どういった支援方法があるのか教えて欲しい。

**回答:**最終的に自立できるようになることを目指して支援することが重要であり、教育や職業訓練の機会の提供などもその中に含まれる。また、大きな課題となるが、都市のインフォーマルセクターは、より良い生活を求めて農村から出てきている人が多いため、農村での生活基盤を整備するということが、根本的な課題解決への支援となり得る、と回答した。

## インターン・就職相談

**質問:**看護師としての知識と技術を活かして、海外で支援活動に従事したいのだが、どのような活動があるか教えて欲しい。

**回答:**NGOの一例として、AMDAでは、現在海外に派遣されている看護師は、直接医療に従事しているのではなく、保健医療の知識を活用し、現地の医療従事者のスキルアップや地域衛生の改善に取り組んでいることを説明した。それとは別に、緊急救援では、看護師が医師と共に派遣されること、事前登録制度があることも紹介した。

また、JICAなど日本の各政府関係機関や国際機関、他のボランティア団体で医療系の活動をしている団体について、インターネットの検索や国際協力関連の専門雑誌などで調べてみることを勧めた。

## 緊急救援・物資輸送

**質問:**NGOが緊急救援でチームを派遣する際、その派遣方法や資金について知りたい。

**回答:**団体によって若干異なるものの、事前に登録いただいている医療従事者（以前に既に派遣した方を含む）に連絡を取り、NGO団体職員を調整員として日本からチームを派遣したり、当該国あるいは近隣諸国に事務所がある場合はそこからスタッフの派遣を行ったりする。また、資金については、一般の寄附を募ったり、外務省の緊急救援のスキームや、民間企業の助成金などを申請したりすることもある、と回答した。

## 海外でのボランティア相談

**質問:**海外での医療支援活動に従事したい。実情とともに、医師として必要なスキル、ニーズの高い分野（何科）など、教えて欲しい。

**回答:**特に緊急救援で派遣される場合、直ちに日本を出発し現地で支援活動に従事することが求められる。勤務体制などの関係で、医療従事者本人が希望はしても、残念なが



AMDA本部事務所での相談

ら、実際に活動に参加するのは困難なケースがほとんどである。中長期にわたる医療支援については上記と異なるので、常日頃、関係団体のホームページや専門誌などで情報を収集することを勧めた。将来は外科を専門にしたいとのことなので、発展途上国では、外科と産婦人科は需要が多いことを伝え、また、日本では症例の少ない熱帯医学の知識は重要なので、研修などを受講して習得しておくことをアドバイスした。

## 組織運営・マネージメント

**質問:**アフリカのある国において活動を開始するため、現地での準備（政府へのNGO登録、銀行送金の状況、首都での事務所賃貸）について聞きたい。

**回答:**政府へのNGO登録のための担当部署、手続き内容、所要時間を説明した。また、日本からの銀行送金が困難であるため、口座を開設したい現地銀行で經由銀行を必ず確認することを案内し、代表的な銀行について紹介した。さらに、事務所を借りる際の賃貸料の目安、治安状況を案内した。

## 総合学習・学校関係

**質問:**最近、日本でも性感染症やHIV感染が問題となっていると聞いた。海外だけでなく、日本でも予防教育などが必要なのではないか。

**回答:**日本は、先進国の中でもHIV/エイズのケースが増え続けている稀な国の一つである。特に若者の間での感染が問題視されており、生徒や学生を対象にした予防教育を行っていくことがとても重要である。AMDAでも、海外での経験を活用し、日本の学校などにおいて予防教育にも協力したいと考えており、昨年度にもHIV/エイズのセミナーを開催したことなどを伝えた。

瀬戸内海放送岡山本社総社  
地区労働者福祉協議会  
増福寺 高橋 重人  
高木 誠一 高塚 照男  
高橋 恭子 高原 昌子  
竹本 光孝 田中 宜子  
田中 好江  
津田 栄・みちる  
露木 久剛 匿名 3名  
中島 以子 中島 幸子  
中西美津枝  
中村 元・泰子  
永山 道子 野崎 嘉子  
野嶋 恭子  
林 小夜子 原田 和則  
原田麻里子  
ファッションタウン児島推進協議会  
(株)フェリシモ地球村の基金  
福山西ロータリークラブ  
藤井 豊 古谷かおり  
伏見健一郎 本出 みさ  
増田 裕子 馬線 薫  
松浦 勝 松本 栄子  
Manila Japanese School-PTA  
丸山麻利子 万木 敏枝  
水島ナザレン教会  
水田 芳 村田富美子  
武蔵一二三 本村 正子  
(財)守口市国際交流協会  
森久保啓子 守田 善行  
矢折 仁志 安井 剛志  
山口絵以子 山下 昌生  
山田由美子 山本 隆二  
横山 真一 吉谷 俊子  
好永 博子 我妻 和博

ハリケーンカトリーナ3名  
小寺 全世 中島 幸子  
万代 裕子

バングラディッシュ 2名  
岩本 淳 小山 健治

ホンジュラス 1名  
AMDA 鎌倉クラブ

ミャンマー 2名  
ジャスコ岡山店  
小山 健治

ミャンマー子ども病院3名  
(株)サンマルク  
本村 正子 万代 裕子

緊急救援 77名  
赤木 研 浅野千恵子  
安達富美子 綾 悦子  
安藤 伸子 飯尾 勝美  
飯田 卓美 池永 修二  
井坂やす子 石毛 宏子  
磯川 貞夫 伊丹 弥生  
伊藤 睦子 伊藤 久美  
井上智恵子 井上 恵子  
植月 正和 梅本 ちえみ  
海老根 宏 遠藤 玲  
遠藤 克之 香川 BPW  
笠置 りか 加藤 順子  
川瀬 成彦 河野 将邦  
河原 敏子 小寺 全世  
後藤 陽子 頃末 清美  
坂元 政子 佐藤 伸一  
佐藤 幸恵 繁森 明美  
庄野真理子 進藤 国子  
杉本 邦子 竹田 清治  
田島ひろみ 辻村 公子  
津山工業高等専門学校 悦子  
内藤 文雄 内藤 馨  
中島 陽一 中田 雅子  
中野 迪代 中村 裕子  
丹羽 昌枝 匿名 3名  
野崎 雅和 肥塚 秀文  
平間進太郎 藤井 洋一  
藤沢 寿三 藤田 桂子  
藤原 澄子 松浦 勝  
松本 彩佳  
南村 俊一・文

三輪 純史 六車 華子 吉村 庄市  
村上 智哉 村西三千代 レイホリスティックサロン  
室川 紀子 茂木由利子 渡邊 満 渡辺 洋子  
森安 春恵  
YDP Japan Network 篠原基金 3名  
山崎 友之 山村 泰秀 岩政 豊子 万代 裕子  
山本 正治 吉井 健 本村 正子

地域医療 4名  
石田 衣子 中島 好美  
宮城学院女子大学  
伊藤 久美  
物資寄付 1名  
池田 順子

※書き損じハガキ  
(年賀状など)を  
集めています。  
AMDAまでご送  
付下さい。

### 山里からの贈り物 (2005年11月)

津山市阿波(旧苫田郡阿波村)にある津山市立阿波小学校に行ってきました。

阿波小学校では、毎年5年生が授業の一環として米づくりを行なっています。児童が育てたお米は学校給食の一部にも使われ、さらに毎年AMDAにもご寄贈いただいています。最近の学校教育では米づくりや農作業などを組み込むカリキュラムはよく聞かれますが、阿波小学校では、田植え・稲刈りはもちろんのこと、病気の予防といった発育途中の稲の生育管理など、殆どの過程を児童が力をあわせて取り組んでいます。こうして子ども達の手によって大事に育てられたお米の一部は毎年AMDAがお預かりし、児童や先生方からご希望の拳がった事業地で、毎年役立てられてきました。



鳥取県との県境に位置する阿波は、人口も700名程(2001年統計)で県内でも過疎化が深刻な地域とされています。今年の5年生は児童数9名と、本当に小さなクラスです。

今回お米を頂戴するにあたって、みんなが少し

でも国際貢献活動のことや開発途上国・紛争国の現状が分かるよう活動写真パネルを持参し、30分ほど子ども達に説明しました。AMDAの事業地について説明を進めていると、5年生の子ども達が、カンボジアやベトナム、スリランカ、パキスタンなど、いろんな国のことを知っていることに驚かされました。アフリカ大陸のスーダン共和国の話をしたときも、大人ですらない人が大勢いるにも関わらず、名前だけは聞いたことがあったようで、スーダンのことを「スーザン・スーザン」と、言いながら楽しそうに地球儀を回して探していました。

最後に子ども達から、「今年作った新米を、パキスタン地震被災者のために役立ててください」との温かいメッセージを預かり、半年がかりで作った大事なお米をいただいて、紅葉のひろがる山間の町をあとにしました。担任の先生から、「今年是不作で30キロしかなく、米もあまりきれいではないので…」と言われましたが、事務所に持帰った玄米は、子ども達の熱意と努力がたくさん詰まった宝物のように、私の目には映りました。(AMDA本部職員 柳田 展秀)

### AMDA 神奈川支部忘年会

AMDA 神奈川支部副代表 松本 哲雄

12月10日(土)、横浜・関内駅前の中華料理店で神奈川支部の忘年会を開きました。出席者は十数名、今回は2人のタイ人看護師も参加しました。心光スリパウンさんは現在AMDA国際医療情報センター、小林国際クリニックを拠点にして、エイズに関する調査活動をしています。横浜国際協力まつりでは中古衣料品の販売で大活躍して下さいました。またメカスワンダムロン・ウボンラッタナー(愛称:イー)さんはバンコク総合病院の看護師で、今年度支部が推薦した神奈川県国際技術研修員として、8月から今年3月まで済生会神奈川県病院で研修しています。彼女は来日前から日本語を勉強していましたが、さらに上達、また英語が堪能と言うマルチリンガルな女性です。この2人は最初互いにタイ人であることは知らなかったようですが、その事を知って大喜び。しかしこれは小林代表の演出だったのかも…。

今回の忘年会の目的は会員の交流以外にもう一つ、支部が推進するネパール・ダマックのAMDA病院付属医療学校に贈る奨学金を集めることにありました。しかし準備不足もあって少し静かな“競り市”になってしまいましたが、祖父母に送ってもらった産直コシヒカリが突然目玉商品として出て来ると言ったこともありました。

自己紹介の中で、鎌倉クラブから活動状況を聞きました。



中央:小林代表 左となり:YEEさん その左となり:心光さん

## 平成 17 年度 ザンビア国別本邦研修 “地域保健サービス” 研修報告

AMDA 本部職員 木下 真絹子

### ザンビアよりクリニカル・オフィサー 2 名来日

ザンビアから研修員を迎えるのはこれで何回目になるの  
であろう？

NGO と連携・協力して行われるプロジェクトとしては  
初めての JICA のザンビア国ルサカ市プライマリヘルスケア  
プロジェクト (Primary Health Care Project: PHC) は 1997  
年より続いている。現在はフェーズ II の段階にあり、  
AMDA より多くの人材が専門家として派遣されている。私  
自身も、去年 8 ヶ月近くザンビアの PHC プロジェクトに派  
遣されていたこともあり、ザンビアという国は遠い国では  
ない。

ここ 1～2 年で定着しつつある本邦研修であるが、今回  
は JICA/PHC プロジェクト管轄区域の保健センターで勤務  
しているクリニカル・オフィサー 2 名がザンビアより派遣  
された。さて、クリニカル・オフィサー (Clinical Officer)  
とは一体どのような医療従事者のことを言うのか？日本では  
ない職業なので、どの研修先に行っても説明を必要とした。  
クリニカル・オフィサーとは“準医者”のような職業  
であり、高校卒業後 3 年間の専門教育を受けたのち、国家  
試験に合格したものが認定される。主に産科・婦人科、小  
児科、内科などの外来患者を担当しており、薬の処方もす  
る。また必要に応じて、リスクの高い患者に対してザンビ  
ア大学付属教育病院への紹介なども行っている。また、地  
域保健における役割としては、コミュニティでのアウト  
リーチ・サービス (予防接種や体重・身長チェック) のモ  
ニタリングと監督・指導なども行なっており、保健師のよ  
うな役目も担っているといえる。

さて、初めての日本滞在のザンビア研修員。初日はやや  
長旅の疲れもあってか緊張した様子であったが、2 日目か  
らは目新しい活動に積極的に参加し、さまざまな事を学ん  
でいた姿がなつかしい。

### 研修趣旨

研修のねらいとしては「行政と住民それぞれの役割と  
責任を理解し、日本の発展の歴史的経緯や地域保健活動  
を通して、それらが住民の健康改善・向上にどのように寄与  
してきたかを学び、研修後のルサカ市における地域保健活  
動の実践に活かしていく」が挙げられた。

### 研修目的

目的は大きく 5 つに分けられた。

- 1) 日本の保健医療システムを学ぶ
- 2) 日本の保健行政がどのように地域の活動を支えているか  
を学ぶ
- 3) 地域ボランティア組織やグループについて学び、ボラ  
ンティア活動がもたらした住民の健康向上へのインパ  
クトを学ぶ

- 4) 保健センタースタッフが住民と行政の間に立って担う  
役割について学ぶ
  - 5) その他：平和教育、日本文化・精神について学ぶ
- この 5 つがバランスよく達成できてはじめて研修の成果  
が出ることになる。

研修日程 (11 月 24 日～12 月 17 日、うち技術研修期間 22 日間)

11 月 24 日 (木)	日本到着
11 月 25 日 (金)	JICA 東京でブリーフィング
11 月 26 日 (土)	東京から岡山へ移動
11 月 27 日 (日)	

### 岡山での研修

11 月 28 日 (月)	AMDA にて研修オリエンテーション PCM ワークショップ (1)
11 月 29 日 (火)	南ブロックおやこクラブ交流会 at 南保健センター 歓迎茶会 at 茶山亭 岡山東商業高校剣道部活動見学
11 月 30 日 (水)	RSK ラジオ局で収録 (ザンビアの紹介) 赤ちゃんすこやか相談視察 at 宇野幼稚園
12 月 1 日 (木)	岡山済生会総合病院視察 岡山市消防局訪問
12 月 2 日 (金)	岡山大学医学部保健学科訪問・交流 岡山大学医学部産科・婦人科学教室訪問・視察
12 月 3 日 (土)	広島記念公園へ (平和教育)
12 月 4 日 (日)	パパママスクール見学 at 北保健センター
12 月 5 日 (月)	岡山市立桃丘小学校訪問
12 月 6 日 (火)	福浜愛育委員会活動 “生活習慣病予防食” 調理実習の参加 一宮愛育委員会研修会 (精神保健) の参加 愛育委員会委員長との討論会
12 月 7 日 (水)	PCM ワークショップ (2) 1 歳 6 ヶ月児健康診査視察 at 東保健センター
12 月 8 日 (木)	新見市遠隔在宅医療支援システム活動視察
12 月 9 日 (金)	岡山研修内容のレビュー 報告書作成準備
12 月 10 日 (土)	岡山から新潟へ移動
12 月 11 日 (日)	

### 新潟での研修

12 月 12 日 (月)	新潟大学での講義に参加
12 月 13 日 (火)	信濃川浄水場訪問 中部下水処理場訪問 新田清掃センター訪問
12 月 14 日 (水)	新潟県保健環境科学研究所への訪問
12 月 15 日 (木)	小針病院小児科を視察
12 月 16 日 (金)	JICA にて研修報告会・評価会出席
12 月 17 日 (土)	日本出発 ザンビア帰国



消防ヘリコプターと緊急医療器具を見学



南ブロックおやこクラブ交流会参加。助産師を迎えて子育て相談。(南保健センター)



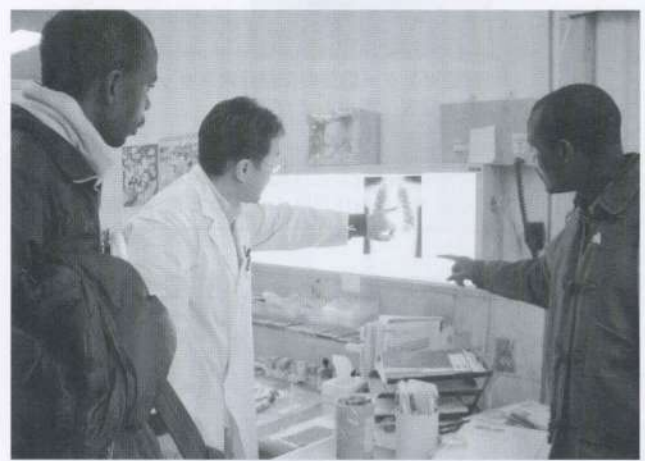
環境公衆衛生施設見学 (中部下水処理場)



緊急通信指令システム見学 (岡山消防局)



パパママスクール参加。妊婦さんを体験 (北保健センター)



小針病院小児科見学



小針病院内のリハビリテーション施設見学

岡山での研修

新潟での研修

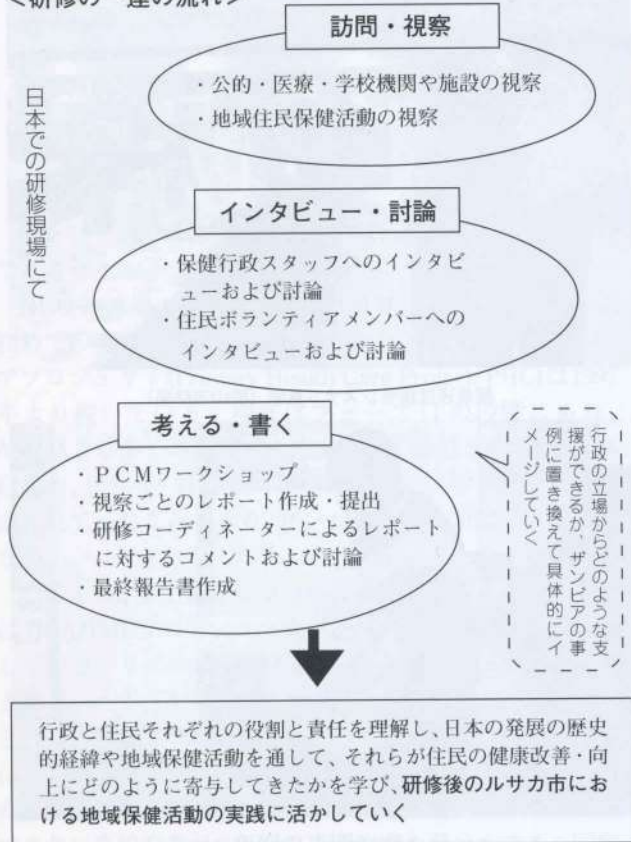
### 研修の流れ

研修日程でもわかるように、研修員たちはさまざまな訪問先を訪れた。地域保健活動を支援・実施している保健センターや、公的民間サービスを提供する消防局や浄水場・下水処理場、大学研究機関や小学校、民間医療サービスを提供する総合病院、市民組織などの受け入れ先の快いご理解により、研修が実施された。

次頁の図に示されるように、これらの研修受け入れ先において、①訪問・視察、②訪問先でのインタビュー・討論が行われた後、③それぞれの研修先から何を学んだか考え、それがどうザンビアの現場で活かされるのかを書いていくことで、研修員は内容をより一層理解し、効果的な研修になることを期待する。



＜研修の一連の流れ＞



ザンビアの現場にて

保健センター勤務の保健行政スタッフに研修成果を発表・提出および指導

研修より体得した住民参加型地域保健活動の向上と地域住民へのさらなる指導を促す



日本文化と精神を学ぶ

研修を終えて

研修員は、“22日間の研修はあっという間だった”と言っていた。また、“日本での研修で言葉では言い表せないほど多くのことを学んだ”と言い残して、ザンビアへ帰国した。

彼らがこの研修より何を学んだか一言で語るのには難しい。しかし、この本邦研修を通じて彼らがみつけたキーワードがある、それをここでいくつか紹介したい。

「チームワーク」

人の命を救うためにさまざまな関係機関（消防士、緊急司令室スタッフ、病院で待つ医者など）のチームワークに

より緊急救援活動が行われている。

「連携・協力」

愛育委員会メンバーは保健センタースタッフと話し合いながら、その地域のために成人病予防のための調理実習のメニューを一緒に決めていく。コミュニティーと保健センターとの連携・協力体制があってはじめて活動が計画され実施される。

オープン病院化モデル事業では、大学病院と地域の産婦人科診療所の連携体制が妊産婦死亡率および乳幼児死亡率を下げる重要な成功の鍵を握っている。

通院困難な寝たきり患者や遠隔地域に住む患者さんのために、開発された在宅医療支援システムは医師会、IT会社そして地域および患者の家族が連携・協力のもとはじめて機能する。

「タイムマネジメント」

さまざまな会合や研修会には参加者が時間に遅れることなく集まりスムーズに開始され、皆が時間に対する規律を持っている。

また、パパママスクールでは3つのグループに分かれて、時間内に効率よく多くのことを学ぶようスケジュールが組まれており、タイムマネジメントがしっかりとされている。

「患者中心で考える」

患者のニーズは？常に患者のために何ができるのかを考え、サービスを提供していく理念の上に医療機関は機能している。

「自主性」

小学生児童たちは自分たちの給食を給食室から運び、配膳しそして後片付けをする。さらに学校内や教室は自分たちで掃除し、汚したら自分で片付けるという自主性を学校で身につけている。

「生きがい」

なぜボランティア活動をするの？人のために何かできることをする、感謝される、その喜びと生きがいを感じるから。

「交流」

核家族がますます増える近年、地域の母親同士の交流やパパ・ママ同士の交流は情報交換だけでなくお互いをサポートさらにエンパワメントしていく上で貴重になっている。

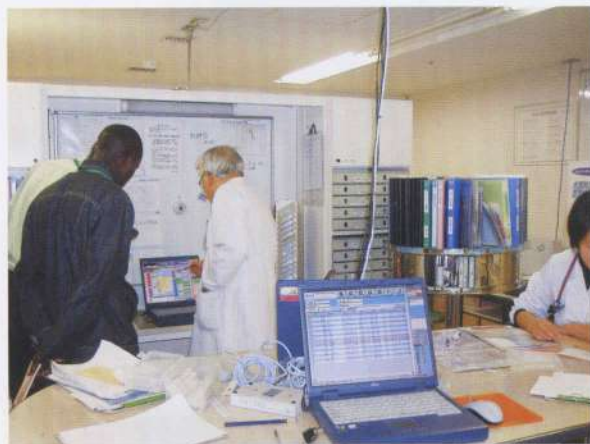
研修員がコメントしたこれらキーワードは、今回学んだ研修の重要なエッセンスであり、地域保健医療活動の基盤となる。ザンビアに戻った研修員が、今回習得した技術や知識と共に、これらのキーワードに示される本質を現場で活かしてくれることを期待している。種が蒔かれ、根付き、いずれ花が咲く日が来るのを楽しみにしている。

今回の研修に直接・間接ご協力下さった関係機関の皆様に変更して御礼申し上げます。

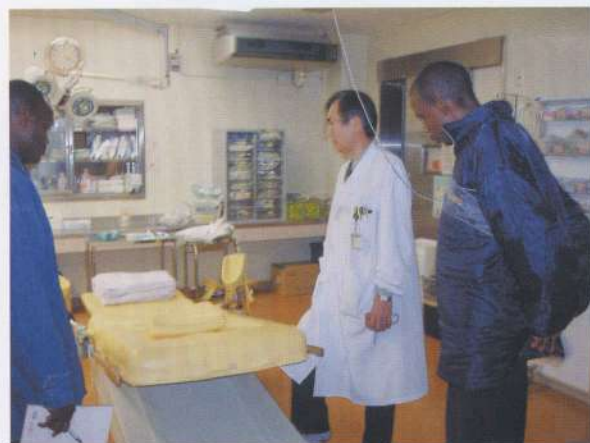
# ザンビアからのJICA研修員、各所で地域保健サービスを研修



愛育委員会活動視察（生活習慣病予防食調理実習）



岡山済生会総合病院視察（日本の総合病院医療システムを学ぶ）



岡山大学医学部附属病院視察（周産期医療施設の見学）



新見市遠隔在宅医療支援システム視察

## AMDA本部事務所 12月のボランティアの皆さん（敬称略） 毎月のボランティアありがとうございます



### ボランティア

#### 一般ボランティア

井口 恵子 枝木 悠紀  
大野 仁 水田 陽子  
黒瀬美砂子 小林 恒子  
小見山奈美子 川上 侑希  
本郷 順子 村上八重子

清輔 幸子 田中 啓子  
中田 園子 近持雄一郎  
梶田 未央

#### 翻訳ボランティア

藤井 倭文子  
Dowding Piers

#### 高校生ボランティア

浮田 麻美 石原 佳奈  
亀川 彩 大原 由貴  
角井 玲 久山 徹  
諏訪 純平 松島 広樹  
三宅 秀明 石黒 香苗  
中山 理恵 小野菜美子  
橋本美沙希 仁科 和也  
岡 祐生 山北 宏貴  
藤井 裕己 鷹取 誠

#### ホームページ作成ボランティア 岡山理科大学インターネット クリエイターズ

(長谷川 誠 延原 克宜  
梅崎 篤志 津村 正幸  
中濱 崇史 小坂部 晋)  
メロンズ (井上智香子  
梅本 明美 木村真知子  
藤井 逸子 藤田 貴美)

求人タイムス  
東京女子大学同窓会  
パブリックリソースセンター

※AMDAでは岡山県外で開催するイベント補助ボランティアを募集しています。AMDAホームページをご覧ください。



ザンビアからのJICA研修員が学校給食見学と学校保健研修のため岡山市立桃丘小学校を訪問



株式会社 道 祀 神  
The Travelers Guardian Inc.

〒108-0014 東京都港区芝5-13-18 MTCビル9階  
TEL: 03-3455-6111 FAX: 03-3455-2442  
〒530-0001 大阪市北区梅田2-5-25 ハービスPLAZA3階  
TEL: 06-6343-7725 FAX: 06-6343-6328  
ホームページ: <http://www.dososhin.com>  
メールアドレス: [info@dososhin.com](mailto:info@dososhin.com)